
笑えばいいじゃん

なかなか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑えばいいじゃん

【Nコード】

N9573I

【作者名】

なかなか

【あらすじ】

結成7年売れそうで売れないコンビ、ナカナカ。笑いにかけた二人の周りで起こる物語。

「オレたちが誰よりも一番おもしろい!!」

ナカナカの漫才

第5期OSSを卒業したオレ、内 晃之は晴れて芸人になった。

7年後……………

「なあ……………」

内の相方、大宮 おおみや 中 あたる が内に声をかける。

「なんだよ？」

内はちょっとダルそうに聞いた。

「そろそろ本番だ
ネタ合わせしないと」

あぁっと軽く言っつて、立ち上がりネタ合わせを始めた。

「はいどーも
ナカナカです」

二人とも壁を見て漫才をはじめめる。
周りの芸人が二人のネタ合わせに耳を傾ける。

この爆笑お笑いバトルは10組中上位3組がオンエアされる厳しい
番組の中で、実力派と呼ばれるナカナカの二人は周りの芸人にとっ
て怖い存在だった。

「もういいよ」

ネタ合わせが終わり本番用のスーツに着替えはじめる。

ネタ合わせ以外で二人が喋ってたところを見た芸人はほとんどいない。

「すみません用意お願いします！」

スタッフが芸人たちにスタジオに来るように促す。
みんな緊張した面持ちでスタジオに向かった。

お客さん百人の前で順番を決めるクジを引いて行く。

内がいるナカナカは一番最後の10番目だった。

司会のアナウンサーが進めて行く。

「それでは芸人達によるネタバトル始めましょう」

その言葉を合図に舞台上からはけて行く。

そしてアナウンサーの紹介が終わり、一組が出て行った。

舞台裏で黙って一組目のネタを見ている内、その向こうでネタの練習をしている中。

「やっぱ…あの二人って仲悪いのかな…」

周りの芸人達が聞こえないように話している。

芸人の間にもナカナカというコンビの仲は悪いと言う噂が流れていた。

「噂じゃねえーばいな」

よそから見ても仲の悪さが見えるくらいハッキリしていた。

「さあ次が最後のコンビです」

今季は三戦全勝いよいよ最終決戦に王手をかけた

ナカナカ!!」

アナウンサーの声が静かになり、出囃子がなり始めた。

「はーいどもナカナカです」

「ヨロシクお願いします」

二人の小気味好い掛け合い漫才が始まる。

内がタンタンと相手を小バカにした感じでボケる。

中はそれに怒濤の勢いでツッコむ。

客席から笑いがやまなかった。

アナウンサーも手を叩いて笑っていた。

「もういいよ」

中が内の肩を手の甲で叩いて漫才が終わった。

「さあ点数のほうが出そろいました」

アナウンサーが明るく言う。

芸人たちには緊張が走っていた。

「では点数はこちら!!」

電光掲示板に10位から順番に得点とコンビ名がかかれていた。

5位まで出た時点でもまだナカナカの名前はない。

中は神に願っていた。

内は黙って見守っていた。

「オンエアされないあと一組は!!」

4位には77点のライダーだった。

悔しそうに天井を見ていた。

「ヨッシャ!」と後ろでガッツポーズをする中。

内は安心した様子はあったが黙ったままだった。

「さあ後は芸人としてのプライドをかけての勝負です!」

3位が開けられる。

ナカナカの名前は出てこなかった。

内、中の手に力が入って行く。

「1位、2位は同時に！」

ナカナカの二人は手を上げていた。

電光掲示板には…

2位 ハーモニー 89点

1位 ナカナカ 95点

周りからは歓声が上がっていた。
アナウンサーも興奮していた。

「オオ〜！！歴代最高得点だ！！」

中は心底嬉しそうにしてたが、内はちょっと引つ掛かるものがあった。

二人の格差

収録終了後…

「おつかれさまでした」

勝った芸人も負けた芸人も明るく挨拶をして出ていった。

「すみません！歴代最高得点の感想お願いします」

ナカナカにコメントを求めて繰るカメラマン。

「やりましたね」

明るく言う中。

それに対して冷たく「もう少しイケたと思うんですよね」と言い戻っていった。

中もカメラに手を振りながら内の後について行った。

二人は楽屋に入ると漫才をした後にいつもやる反省会をしていた。

「何か言うことはないか？」とキツク言う内、中は明るく「最高得点でよかったじゃん」と答えた。

「お前がツツコミがまなければもっと言ってたんだよ！」
「ワカンネ〜じゃね〜か！」

ちよつとずつ二人とも口調が荒くなっていく。

周りの芸人も冷や冷やと二人を見つめていた。

「いつになったら嘸まなくなるんだよ！」

「ワリイな……」

ふて腐れたように中が言う。

「なんだよその態度は！」

内が中の胸倉を掴んで言う。

「すぐに暴力かよ」

「そうだよ！！」

内が中の顔を殴る。

殴られた中は楽屋の椅子に突っ込んでいった。

スタッフが楽屋に入った時には、二人とも周りの芸人に止められ、顔は痣だらけだった。

芸人達が集まってると思えないほど静かだった。

「またかよ……」

スタッフは呆れながら呟いた。

マネージャーは遅れて楽屋に入ってきた。

「お前らまたかよ！」

マネージャーは二人の腕を引っ張りながら出て行った。
周りの芸人はナカナカの悪さを目の前で実感した。

「なにも殴り合いまで…」

「だから…」

マネージャーに言いかけて黙る内。
中はまだふて腐れた様子だった。

「二人の問題はちゃんと解決しろよ」

ため息混じりに言っただけで局から出て行った。
二人は気まずい空気のまま各自家に帰って行った。

「ただいま」

内は自分の住むアパートの部屋に帰って来た。

「おかえり」

内と同棲している岡田 裕子 の声がキッチンから聞こえる。

「ご飯作ってるからちょっと待ってて」

内は何も言わずにテーブルの前に座った。
5分くらいたつと、裕子が内の好きなオムライスを内の前に置いた。

「芸人になってから晃之さ、毎日楽しそうだね」

裕子は微笑みながら言った。
内もそう思っていた。

ただの不良だった内は、裕子に勧められOSS入ったが誰も柄の悪い内とは絡んではくれなかった。
そんなとき、中だけが内と絡んでくれたのだ。
ちよっとした些細なことだが内にとっては嬉しいことだった。

「そうだな…」

内は笑いながら呟いた。

中は、家で今日の漫才のビデオを見ていた。
大事な落ち前に噛んでしまう今に始まったことではない。
しかし中々治らないのだ。

「また迷惑かけちゃった…」

一人の部屋でポツリと呟いた。
ネタを書いている内の何にも役にたてていない。
そんな思いが知らないうちにプレッシャーになっていた。

「明日は劇場か…」

ホームのはずの劇場ですら緊張するようになって来た。
緊張を取るために一杯だけビールを飲んだら顔が真っ赤になって寝入ってしまった。

次の日

劇場―

「はいどうもナカナカです」

「ヨロシクお願いします」

いつも通りのナカナカの漫才が始まった。

小気味好い掛け合いを見せ、お客から笑いが起こる。

しかしハプニングが起きた。

中がネタを飛ばしてしまった。

内は慌てずそれに合わせてアドリブでボケて行く。

中も動揺しているが、内のアドリブに合わせてツッコミをいれる。

「もういいよ」

失敗を客に気付かせることなく漫才を終えた。

舞台裏に入ると内が中の顔を殴った。

「おい！昨日は大事なこと噛んで…今日はネタ飛ばして…」

「ワリイ…」

中は泣きそうな声で呟いた。

「はぁ…もういいよ…」

投げ捨てるように言って楽屋に戻って行った。

中は端でうずくまって劇場が終わるまで動かなかった。

若手マンザイ王座戦？

中は先輩達と居酒屋に来ていた。

普段酒を飲まない中がかなりのペースで飲んでいるのを心配そうに見る パリブーツ の三田村。

「中飲み過ぎじゃない？」

「んなことないっすよ」

周りの心配をよそに浴びるように飲む中。
もう顔は真っ赤になっていた。

「内のやつに見捨てられたんすかね……」

目から涙をながしながら言う。

三田村はつまみを食べながら

「殴られるのはいつものことじゃん」と言った。

「いつもは殴って文句言ってくるのに今日は もういいよ って…」

…」

「お前女子か！」

三田村は叩きながら言った。

中は笑いながら「アホくさいですね」と言いながら酒を飲んだ。

「まだ書いてるの？」

裕子は夜中に居間でネタを書いている内の肩に手を乗せながら言う

た。

「あ……次は爆バトの最終決戦だからな」

笑いながら裕子の目を見て言う。

裕子も目をみて笑いながら「そっか……んじゃ先に寝てるね」と言っ
て寝室に入って行った。

内は中に腹がたっていた。

注意した昨日の今日に大きなミスをする。

相方としては許せないがあの時怒りよりも哀しみが大きかった。

「アイツはアイツなりに頑張ってるんだろっけど……」

内はため息をつきながら蛍光灯を見ていた。

ハエが2匹飛んでいた。

二日後ー

バラエティ番組収録の日。

今日は 島田慎之助 の番組の雛段の一員として来ていた。

楽屋の慎之助に挨拶に行く内と中。

「おはようございます」

「今日はヨロシクお願いします」

慎之助はナカナカに紙を渡した。

二人はキョトンとしながら受け取った。

「古本興業主催の漫才コンテスト“若手マンザイ王座戦” っ大会や結成十年以内なら出れんねんお前らまだ出れはずよな？」

二人は声を合わせて「出れます」と答えた。

慎之助はニツコリ笑って「お前ら見たいなのが決勝に残ればありがたいわ

頑張れよ」と背中を押した。

「これ…新ネタ」

内は気まずそうに中に渡す。

「よしっ！んじゃー今日からネタ合わせな」

中はガッツポーズと言う。

内は啞然としていたが「ああ…」と返事をした。

爆バト最終決戦まで後二週間。

二人は二週間後に優勝して、マンザイ王座にも勢いで登ることを思い描いていた。

爆バト最終決戦！

二週間後ー

内はビジネスホテルに泊まっていた。

「……よし……」

舞台用のスーツを持って部屋を出た。

今日は爆バト最終決戦の日。

いつも顔には出さない内もやる気が表情に出ていた。

中は自分の地元が会場だったので実家に泊まっていた。
両親は共働きで家にはいなかった。

「じゃあー!!」

気合いをいれて最終決戦の舞台へと向かった。

北海道函館市ー

本番前のリハーサルを終えて芸人達は楽屋で緊張をほぐしていた。
ナカナカの二人はスーツに着替えお互いの肩を軽く殴った。
それを見てた芸人達は、
思ったより仲悪くねえじゃん
と口にはしないが思っていた。

「ヨォー何かいつもと違うじゃん」

三田村が相方の 遼 と一緒にやって来た。

中は笑顔で「負けたくないっすから」と答えた。

「オレら追われる側だもんな」

パリブーツは爆バトの十七代目のチャンピオン、今日だれよりもプレッシャーがかかっている。

「お互い頑張りましょうよ」

中はそう言つてトイレに向かつて行つた。

遼もそれに続いて行つた。

中がいなくなったのを見て内に聞く。

「お前さ、中とケンカばっかだろ」

「まあ……そつすね……」

「ホントに珍しいコンビだなお前らつて」

そう言い残して三田村は他の芸人の輪に交ざっていった。

内は何が言いたいのがよく分からなかったが、言われて悪い気はしなかった。

本番五分前！

周りの芸人の緊張が高まっていく。
パリブーツの二人は特別な入場があるらしく何処かへ行ってしまう

た。

「ナカナカさんは十番目だから……………一番最後の入場になります」

スタッフが説明をしていく。

それを聞いた内はネクタイ締め直し、中はちょっと緩くした。

そして本番が始まった。

「今季４勝を達成したバトラー達が今年一番になるためにしのぎを削ります

さあ爆バト最終決戦スタートです!!」

アナウンサーの紹介とともに次々芸人達が出て行く。

「緊張してんのか？」

中が笑いながら聞いてくる。

内は笑いながら「するわけねえだろ」と言った。

そしてナカナカの入場の番が来た。

「番組史上最高得点保持者

今季は全て九十点越え

今大会の優勝候補

ナカナカ!!」

二酸化炭素ガスが出て客席の奥からナカナカの二人が出て来た。

客席から歓声が聞こえる。

手を振りながら舞台に向かって行く内。

筋肉アピールをしながら歓声を受けている。

二人が舞台の上に並ぶと元々薄暗かった明かりがさらに暗くなる。

「そして第十七代目チャンピオン

漫才界の毒舌王

パリブーツ!!」

後ろのセットが分かれてチャンピオンベルトを背負った二人が出て来た。

内は三田村と目が合ったがフイッと違う方を見た。

そんな内を三田村は笑顔で見ていた。

「順番はくじ引き抽選で決めてもらいましょう」

そう言う目目の前に十一個の箱が並べられた。

一斉に箱を選び出す。

芸人らしいノリを交えつつ順番が決まった。

ナカナカは一番最後、その前にパリブーツ。

三田村達の漫才の後はどんな芸人だろうとやりにくい。

ナカナカはさらに緊張感が増していった。

舞台裏にくと一時的に緊張が解ける芸人たち。

「いや、アイツらがオレらの後か……」

三田村は頭を書きながら遼に言っていた。

遼は笑いながら「まあいんちゃうんか」と三田村の肩を叩いていた。

「ご愁傷様です」

ナカナカに後輩のオリジナルレイディオの藤林が嫌みっぽく言う。

「何がご愁傷様だよ

お前もパリブーツの前じゃねえかよ」

中は藤林をヘッドロックしながら言った。

相方の中澤は「前と後じゃ違いますよ」と言った。

騒いでるなかで内は誰かと電話をしていた。

明るい感じではなかった。

「……………わかったよ、じゃあな……元気でやれよ！」

切った電話を少し眺めていた。

そしてトップバッターのネタが始まった。

「中……！ネタ合わせするぞ……！」

内は後輩とふざけている中を呼んだ。

中はヘッドロックを外して内のいる方に向かった。

次々と進んで行き、オリジナルレイディオもネタを終えて戻ってき

た。

「そろそろだな……」

中は緊張した面持ちで呟いた。
袖から舞台を見ていた。

「緊張するな……」

内は一人で呟いたつもりが中にまで聞こえていた。
中は内が声に出すほど緊張している姿をはじめて見た。
パリブーツのネタが終盤に差し掛かり、客も盛り上がっていく。

見ている限り今日一番の笑いの多さだった。

ネタが終わりアナウンサーからインタビューを受けるパリブーツ。

「ナカナカさんスタンバイお願いします」

スタッフが幕のそばまで案内する。
内の落ち着きがいつもよりない。

「最後のチャレンジャーは……」

ナカナカ！」

二人とも勢いよくマイクまで飛び出していく。

「ナカナカです
ヨロシクお願いします」

いつもどおり漫才が始まる。

ネタは新ネタだが自信を持ってできるそう確信している中、それに対して今一つ漫才に集中仕切れていない内。

「それと同時に前前の鼻毛がドーン！」

「ならねえよ！！見たことねえだろそんなやつ！」

掛け合い漫才が順調に進んでいるように思えたが……内に僅かに勢いがなかった。

「もういいよ」

「って言ったら鼻毛がドーン！」

「ならねえって！！」

二人とも客に一礼してアナウンサーが進行するのを待つ。

その夜―

乾杯！！

爆バトの打ち上げをする芸人達。

中はパリブーツと話しながらお茶を飲んでいた。

「結局パリブーさんの二連覇ですか」

「まあな」

三田村は笑いながら勝利の酒を飲んでいた。

結局三点差でパリブーに敗れたナカナカ。

内はショックだったのか打ち上げにくることはなかった。

ドンチャン騒ぎは閉店時間まで続いた。

その夜―

内は自宅に帰って来た。

テーブルの上に置き手紙があった。

【私には芸人の妻、嫁として勤めることが出来ないみたいです
晃之と一緒に………】

涙でにじんでこれ以上は見れなかった。

ずっといると思っていたものを失うのは、こんなに悲しいんだ。

内は初めて体験した思いに涙が止まらなかった。

ギター

一週間後―

ダウンビレッジ の前説に呼ばれて漫才をしている。
関東ローカルの爆バトで気に入ったようだ。

ナカナカは前説を終えて袖に帰る。

「はあ……」

決して明るい方ではない内が爆バトが終わってから溜め息が増えてきた。
仕事では見せない、相方には見せない、内はこの二つを心に決めていた。

「お疲れさん」

マネージャーがファイルを開きながら迎えてくれた。

「今日はこれ見て、明日は京都に営業な」

内は黙って袖からダウンビレッジのトークを見ていた。
中は客席の方に周って見ていた。

二人の会話を爆バト以来見ないマネージャーは頭を抱えていた。

「お疲れ様でした」

ナカナカは今日の出演者に挨拶をしていた。

ダウンビレッジもこの局を出ようとしていた。

「お前らええやん」

浜本はナカナカにそう言つて局を出て言った。

「ありがとうございます！」

中は勢いよく頭を下げた。

内もそれに合わせて頭を下げた。

「やったぜ」とはしゃぐ中。

ガッツポーズはしてるがあまり嬉しそうに見えない内。

「はぁ……出て来たのはいいけど……どうしよう」

裕子は同棲していた家を出て来たが、東京に住む場所は他になく友達の家泊まっていた。

しかし、迷惑はかけたくないで実家に帰ることにした。

それに裕子には夢があった。

世界を見て回ることにした。

「明日か……」

明日には実家の秋田に帰ることを決めた。

内にも電話でそう告げた。

そのとき内は子供のように明るく応援してくれた。

重い足取りで友達の家へと向かう。

「あれ…裕子ちゃん！」

後ろから声がした。

その声の主は中だ。

裕子の隣りに走ってきた歩幅を合わせて歩く。

「あのさ……内の様子が最近変なんだけど…何か知ってることない？」

中の言葉が胸に刺さった。

「あの……」

「やっぱ…爆バト負けたのがショックだったのかな……」

裕子の言葉をかき消すように言う。

「まあアイツのこと頼むよ！じゃあな」

手を振りながら走っていく。

裕子は一人で人込みの中にたたずんでいた。

内は渋谷の駅の前に座っていた。

裕子と初めての待ち合わせがここだった。

未練がましい自分が恥ずかしくて一人で笑っていた。

「あの…そこ…ウチの場所やねんけど…」

ギターを持った小柄な女の子が内の目の前に立って言った。

内はその一言でハッと目を覚まして「ゴメン…」って言って立ち上がった。

ギターの子は内の顔をジッと見つめていた。
内はちよつと恥ずかしくなり背を向けて歩き出した。

「あゝお笑いさんや！」

後ろで思い出したように言う。

周りの視線が二人に集まる。

内は急ぎ足でこの場から離れて行った。

「今度ウチの歌聞きに来てなゝ！！」

女性とは思えない大きな声を張り上げて言った。
内は聞いてないフリをして遠くへ早歩きしていった。

夜になり四月半の風は冷たかった。

「おゝけっこう人いるな」

渋谷駅の近くに人だかりが出来ていた。
人だかりの一番奥にギターを持った娘が座っていた。
気持ちよさそうに歌っていた。

「やつぱ…歌うめゝな…」

中は女の子を見て呟いた。
歌が終わり拍手が贈られた。

「美優！帰るぞ！」

ちよつと離れたところで大きな声を出す。
美優はビックリして周りを見渡していた。

「おっ…中兄ちゃん」

大きく手を振る美優、それに軽く手を振り返す中。
ギターをしまい、中のところに走ってくる。

「じゃあ…行くぞ」

中は美優を連れて家へと歩き出した。

「そつだ今日さ、プロお笑いさん見てんで」

中は笑顔で「誰をみたの？」と聞いた。

「名前は知らんねん」

美優が両手を上げて答える。

中は苦笑いしながら、やっぱコイツはアホだなと思った。

美優は中の家についた。

家に入るとまず先に寢床を確保しにいった。

「ウチここな！」

大きな声で中がいつも寝てる布団を指差す。

「そこはオレの……まあいちゃ」

「優しいね」

うるせえと照れながら中は台所に向かった。
美優は横になってテレビを見ていた。

「あつ…中兄ちゃん！この人！！…って」

中は美優の隣にしゃがんで啞然としていた。

「内かよ」

「兄ちゃんと映ってる」

美優は手をたたいて笑っていた。

「なんか運命やんな」

「どこがだよ」

そう言ってまた台所に向かった。

美優は笑って二人が出てる番組を見ていた。

爆笑チャーハン

次の日―

二人は新幹線で京都に向かっていった。

内は静かにノートにネタを書いていた。

中はそれを後ろから見ていた。

内は気付いていないようだった。

「あと十分で着きますから用意しといてくださいね」

マナージャーの言葉で動き始める二人。

今日の京都での営業は老人会のパーティーでネタを十五分やるものだ。

十五分なら短いのを三本も組み合わせれば出来るが、ナカナカはそんな事はせずに十五分用のネタを作って披露している。

「さあ急いでください」

マナージャーが急かすので二人は小走りで駅を出てタクシーで目的地まで向かう。

車内で、どのネタをやるか決めている内。

中はその隣りでメールをしていた。

メールを見て笑顔でケータイを閉じた。

「着きましたよ」

マネージャーはタクシーに精算をして、二人を先に降ろした。
裏口から控室に入っていた。

控室には大阪古本の先輩の 爆笑チャーハン の山田がイスに座って煙草を吸っていた。

二人とも静かにイスについてネタを書く内とケータイを開く中。
マネージャーは老人会の会長に挨拶をしていた。

「オィース」

西田の相方の小鉄がドアを開けて元気よく入ってくる。

「おはようございます」「あざす」

二人の挨拶を軽く受けて楽屋にいる山田に話しかける。
ネタを合わせている様子はなかった。

「今日をお願いします」

会長が控室に入って来た。

長々と挨拶をし始める。

二組ともうんざりしながら聞いていた。

「もういいよ」

ナカナカは漫才を終えて戻って来た。
老人を相手にするとあまり早いテンポで出来ないのでナカナカには、

ちょっとツライものがあつた。

ナカナカが下がると爆笑チャーハンが出ていった。
爆笑チャーハンもいつもよりもゆっくりの漫才をしていた。

「おつかれさま」

帰るのは明日だからこの仕事終わったら各自好きにしてください」

マネージャーがファイルを見ながら言う。

つまり今日一日は時間を京都で時間を潰せ　という古本興業からの指示である。

控室でナカナカは内がネタを書き、中はケータイをずっといじっていた。

マネージャーは次の芸人の仕事がある　と出て行った。

マネージャーが出た後すぐに、内もトイレにたった。

中はトイレにたった内が書いていたネタのノートを手にとって見始めた。

「……三分用なんて何で書いてんだ……」

中はいつもよりも細かく入っているボケに疑問を抱いていた。

「あつ……おい!!」

トイレから戻って来た内は中からネタ帳を手から取った。

何も言わずに中は、そっぽを向いた。

内も何も言わずまたネタを書き始めた。

爆笑チャーハンが帰って来たのは何故か三十分後だった。

「おつかれした〜」

爆笑チャーハンが営業を終えて、マネージャーが取ったホテルに向かった。

内もゆっくりとネタ帳をしまつてホテルに向かった。

中は内とは違う方向に足を進めた。

止めようとしたが言葉を留める内、そしてホテルに歩き始めた。

営業の後って……

中は歩いて一戸建ての古めの家の前にいた。
表札には 会田 とかいてある。

「久し振りだな…ここ来るの」

戸を開けて家に上がる。

しかし、誰もおらず水の音が聞こえそうなくらい静かだった。

「おじゃましま〜す」

言っでは見たが返事は一切ない。

家中探したが人は見つからなかった。

あきらめてテレビを見ていると、ケータイが鳴った。
ディスプレイには美優の名前が出ていた。

「もしもし、どうした？」

『もしもし、中兄ちゃん』

美優の明るい声がした。

「なんだよ」

『そっちに母さんとかおる？』

「いないよ」

『やっぱり旅行行くなってゆつてたもん』

中はため息をついて一言も言わずに黙っていた。

『そんな訳なんで
ほなね〜』

美優が電話を切るとまた家中がシンとなった。

中は何気なくテレビをつけると爆バトのファイナルが入っていた。

「そっか今日が放送日か…」

オリジナルレイディオがネタをしていた。

「……………ぶ…やっぱ面白いなこいつら」

一人の部屋で呟いた。

そして、パリブーツが出て来て漫才を始めた。

優勝者だけに毒舌なボケが笑いを誘った。

そして何より遼のツッコミが鋭かった。

中も気付いていた、ナカナカの漫才が1位にならない理由を。
他の漫才コンビのツッコミが鋭いから自分のツッコミがダルク見える。

内がどれだけボケても消化不良で終わる。

内に迷惑をかけてばかりかけている。

そう思う日々が続く中。

「若手マンザイ王座戦か…」

次の日ー

駅でマネージャーとナカナカの二人は待ち合わせをしていた。

「はぁ…遅いですね…」

「あぁ…」

「……………」

爆笑チャーハンが待ち合わせ時間に来ずにまっている三人。

ナカナカが爆笑チャーハンのマネージャーに電話する。

「えっ…本当ですか？」

マネージャーが驚いたように聞き返した。

電話の向こうで謝っているような声が聞こえる。

「わかりました」

マネージャーは電話を切って、内と中に新幹線に乗るように指示する。

「チャーハンさんは？」

「もう大阪に帰ったそうです」

内は黙って新幹線に乗る準備を始めた。

「チャーハンさんらしいっすね」と中は笑っていた。

マネージャーも「そうだね」と言って駅のホームに歩き始めた。

夜八時―

内は渋谷駅に来ていた。

美優が歌ってるのを遠くから見ている。
裕子との事を思い出しながら……。

「ありがとうございました」

美優は大きな声で周りの人にお礼を言った。

そして、ギターをしまい内の方に近付いてきた。

内は顔をフツと逸した。

内の横をスーッと通り過ぎて行った。

ホッとしたが心の中に残念というか言葉に出来ないモヤモヤが出来た。

渋谷の駅前で腰をかけて座って空を眺めはじめた。

五分くらいたつた頃に中が駅に向かうのを見つけた。

ずっと中のことを見ていると、中も内に気付いたようだ。
そのまま駅から帰っていった。

「なにしてんだよ……」

一人で呟いて笑っていた。

WMO!!

八月―

この日古本興業の若手は大騒ぎだった。
それは一つのポスターのせいだった。

「1000万だつてよ」

「エントリー今日からだつてよ」

「オレ達もうして来たぜ」

「早いな!？」

若手が盛り上がって所に中は三田村と一緒に交ざっていた。

「結成10年以内だつてよ」

「パリブーさんギリギリいけんじゃないすか」

二人は笑いながら話していた。

遼次第だけとなつとおどける三田村に後ろから声がした。

「三田村く WMO（若手マンザイ王座戦）申し込んでいたから」

遼の言葉に驚く三田村。

「マジで!」

締切は一週間後、予選は一か月後、本選は四か月後。
パリブーツも出るからには優勝を狙う。

中は内に相談するべきが迷っていた。

三人の近くを内が通りかかった。

「あざす」

「おゝ内ゝお前らこれ出んのか？」

三田村が明るく聞いた。

「あつもう申し込みました」

「えっ?!」

中は驚き過ぎて、腰を抜かしてしまった。

「大丈夫か」三田村は肩を支えて立たせた。

「中、明日からネタ作りな」

「お…おゝ」

久し振りの会話に、またビックリして腰を抜かしてしまった。

夜―

珍しく二人で外を歩いていた。

「どこでネタ作りすんだよ」

「オレン家でいんじゃねえか」

内は煙草を吸いながら答えた。

煙草を吸わない中は、煙たそうに「そうか……でも裕子ちゃんに迷惑かけるし…オレン家がいいよ」とメールをしながら言った。

二人は家に向かうために歩きだした。

自然と漫才のときの立ち位置になっていた。

その後ろから三田村が二人の後ろ姿を写メを撮って笑って見ていた。

中のアパートの前に来ると、内は吸いかけの煙草を消した。

「この203号室だから先に上がったって」

そう言っただけはアパートを通り過ぎて行った。

その姿を見ずに内は家に上がって行く。

部屋に鍵はかけてなく「ぶっそうだな…」そう呟いて部屋に入った。

中が帰って来たのは十五分後だった。

「ワリイ待たせた」

中が勢いよくドア開ける。

ノートにネタを書きながら、「遅いだろ！」怒っている様子だった。

「ちよつと用事があつてよ」

「おゝ久し振りですよん」

内は駅で歌っていた女の子がいきなり目の前に現われて加えていた煙草を落とした。

「熱っ！！……で…誰その娘？」

何事もなかったかのように聞く。

美優は笑いながら自己紹介をした。

「うち、会田美優ゆうねんヨロシクな」

ギターを持って、向こうの奥の部屋に入っていた。

「んじゃ〜ネタ作るか…」

中が内の向かいに座った。

中の目の前にほぼ書き終えたネタ帳を見せた。

「あつ…もう書いてんだ…」

「あのさ…オレさ、お前に明日って言わなかったけ？」

内は呆れながら中に聞いた。

中が頭に手をあてながら「…あつ…」と言って倒れこんだ。

「まあいいや…明日までにそれ見ておけよ」

そう言い残して部屋を出ていった。

美優は窓からアパートを出て行く様子を見ていた。

「意外とゴリラ顔やな…」

一人で笑いながら呟いた。

ライブ全開

八月下旬―

締切を過ぎて予選まで残り一週間に迫った。

しかし、いつもと変わらず芸人らしい空気が古本本社に流れる。

会議室では明日行つ若手を集まってやるライブの最後のリハーサル兼打ち合わせをしていた。

ナカナカとオリジナルレイディオなど若手のエース級が一同にやる、そこそこ大きなライブである。

「んじゃ〜それでいいすね」

決定したようでみんな「おつかれさまでした」と言つて出て行く。内と中は会議室残つてネタ合わせを始めた。

「短いのを二本つてキツいな〜」

会議室の天井を見ながら言う内。

中はネタ帳を見て何かをつぶやいていた。

「……何かしたか？」

中に心配そうに聞く。

しかし、何も答えずネタ帳を見てつぶやいていた。

「明日、早いし今日は終わるか」

中から返事がない。

内は中の肩を揺らす。

「あつ…何？」中がマヌケな声を出す。

「明日、早いから今日は終わりな」

「あ……ああ……」

内はネタ帳をしまつて、コピーを中に渡し会議室から出ていった。

「……………言えねえよな……」

中はコピーを持ち上げて、つぶやいていた。

ライブ当日ー

「は…いど…も」

「ナカナカですヨロシクお願いします」

ライブはナカナカの漫才から始まった。

新ネタを披露していた。

最初は緊張した様子だったが、客のウケ具合はそこそこよかった。

「いい加減にしろ」

「あざっした」

漫才を終えて二人は袖に戻って来た。

「フウ…」

大きく息をはいて、内はネクタイを緩めた。

中はスーツを脱いでタンクトップとパンツ一丁になった。

出囃子と同時にライダーズが出ていった。

そして、無事にライブを終えて打ち上げに来ていた。

「おつかれさまでした

乾杯！！」

みんなワイワイ騒いで食べ始める。

藤林がかなりのペースで飲んで酔っ払っていく。

藤林が「いやゝ兄さん結婚しないんすか」中の頬を突っ突きながら聞いてくる。

「相手がいねえからなゝ
出来ねえよ」

頭を書きながら答える中。

藤林は頬を引っ張りながら「いやゝ噂ありますよゝあの娘とゝ」ギリギリの滑舌で聞く。

「うるせゝよ、あくまで噂だからな……」

「意味ありげな言い方ですね……」

中が藤林の頭をヘッドロックしながら酒を飲んだ。

内はネタのことを考えながら隅っこで一人酒を飲まずボーッと

いた。

内と中はお互い心に何かを抱えたままWMOの一回戦を迎えることになった。

良いことづくめ……

全国総勢2558組が初代チャンピオンを目指して、自慢の漫才で勝負する。

まず一回戦は全国7か所で二分のネタを披露する。

ナカナカは営業の関係で東京ではなく、仙台予選に来ていた。

「仙台で百組以上か…」

「…ああ…」

会場の前で入るために並んでいた。

ギリギリに来たため、ほぼ最後尾になってしまった。

みんなエントリー番号がついている札をつけていることに中は気付いた。

「なあオレたち札なくていいのかよ」

「…これだよ」

内がカバンから札をだし中に渡す。

その番号を見てまた腰が抜けそうになった。

「1番かよ……」

つぶやいている間にもドンドン時間は迫っていた。

「撮りまゝす」

今は番号と一緒に写真を撮られている。

一番なのでネタの順番も一番最初らしい。

中の体は緊張でドンドン固くなっていく。

開演まで残り三十分どこを歩いてもネタ合わせしているコンビがいる。

「……なあ内、オレたちも」

「大丈夫だって、今までやって来たやつだろ」

中の言葉を遮って内が言った。

内も人には見せないが、スゴく緊張していた。

もうタバコは、一箱開けてしまった。

見せない緊張をしている内のケータイがなった。

ケータイを開いて見ると2通メールが来ていた。

一通はプロパチンカーになりませんか というイタメ。

そして、もう一通は…裕子からだった。

ケータイの画面を見て表情が固くなる。

そして立ち上がり、「ネタ合わせすっぞ」と言って中を廊下に連れ出した。

「いらねえって…」といいながらも中は売れしそだった。

司会のエイティンファイフティンがお客さんを暖めていく。

「さあそろそろいきましようか

一組目どうぞ」

中と内が出ていくと客席からビックリような歓声が聞こえる。

「どゝもナカナカです」

「ヨロシクお願いします」

トップバッターはお客さんが固いというが、笑いが絶えず好印象のまま漫才を終えた。

舞台裏でエイファイフが笑っていた。

「おもしろいなゝお前ら」

岡部が小さい体を震わせて笑っていた。

矢村も笑顔で腕を組んでいた。

「決勝いけるんちゃうん」と初めて会うのに話しかけてくる矢村。岡部は喋らずナカナカがいなくなるとリラックスしたようだった。

中は東京に帰る準備をして、内は客席の方でキョロキョロしていた。

中は会場から出て駅に向かった。

アパートの前につくとケータイがなった。

マネージャーからの電話に恐る恐る出て見ると、「いやゝおめでとう初戦突破じゃん」

中はホッと肩を降ろした。

「あとな、初戦突破の祝いにもう一個良いことあるぞ」
「えっマジすか？」

中は明るく言う。

そのとき丁度、部屋のドアを開けていた。

「冠番組が決まったぞ」

「えっ！！」

中は腰を抜かして下駄箱にもものすごい音をたてて、頭をぶつけた。

「なにしたん？大丈夫？」

美優はスウェット姿で出て来ると、玄関で腰を抜かしている中がいた。

美優に大丈夫だと示して話を続けた。

「明日打ち合わせな」

「はい、わかりました」

「ゴールデンだからな
頑張れよ」

電話を切った中を心配そうに美優は見つめていた。

中は笑って「ワリイけど肩かしてくれ」と美優を呼んだ。

「しゃくないな」

中を支えながら、居間まで連れて行く。

途中で「重いな」と何回も笑顔で呟いた。

冠番組！

「おはようございます」

フジサンテレビの会議室に入り打ち合わせにきた中。

「お～早いな～」

ディレクターが煙草を吸いながらイスに腰掛けていた。

「いや～初の冠番組ですから」と言いながらイスに座った。

それから会話がないまま十分が過ぎた。

「内おそいな～」

ボソツと中がつぶやくと、ディレクターが「へっ？アイツはこねえよ」煙草を消しながら言う。

中は少しポカ～ンとしてから「な……何でなんすか？」と声を張る。

「んなデケエ声だすなよ

アイツはTBHでレギュラーあるんだよ」

それを聞いて、二人でレギュラーを持てた嬉しさと二人でできない悲しさが出てきた。

「あつちはエイフィフの岡部と、こっちは矢村とだからな
ちよっと複雑だけだな……」

二人で会話していると、矢村と二人のマナージャーが入ってきた。

「んじゃー始めますか」

ディレクターが眼鏡をかけ直しながら立ち上がる。

T B Hの会議室に内が着ていた。

ドアを開けると岡部が一人で座っていた。

「おざゝす」

「…おう」

きまづい空気が会議室に流れる。

打ち合わせが始まったのはこれから三十分後だった。

内も初めての冠番組で張り切っていた。

爆バト準優勝、W M Oもある、冠番組、今二人は絶好調だった。

中の打ち合わせが終わったのは、午後九時だった。

「アイツまだ待ってんのかな…」

電車の中で一人つぶやいた。

お台場から渋谷に向かっている。

電車の時間が長く感じる、中は美優のことが心配になってきた。

三十分かけて渋谷駅につくと美優はまだ歌っていた。

十時近くになると聞いてくれる人はいないが、一生懸命歌っていた。
歌が終わると中は美優に声をかけた。

「ワリイ待たせたな」

美優はギターをしまつて「んじゃ帰りますか」立ち上がり歩きだした。

中もその後が続いて歩きだした。

帰り道はいつも美優が話して、中が聞き役だった。今日は中がずっと話していた。

美優はそれを笑顔で聞いていた。

「……なああそこに誰かおれへん？」
「ホントだ」

二人がアパートに近付いて行くと男の姿がハッキリ見えた。

「内かよ」ため息のように息をはいた。

「こんちわ」美優はスツと内の横を通っていった。

「どうしたんだよ？」

中は珍しく自分から話しかけた。

内は申し訳なさそうに「いや…なんつうかオレさレギュラー決まっただけだよ…」

それを聞いて中は「聞いた聞いた、オレも決まっただよ」

内は啞然とした後、「なんだよんじゃ帰るわ」と言つて帰つて

い
っ
た。

オンステージ

十一月上旬ー

WMO三回戦ー

「はーいどもナカナカです」

二人は三回戦のトップで漫才をしていた。

エントリー番号が1番のせいでWMOの予選はずっとトップで漫才をしてきた。

「もういいよ」

「あざーした」

舞台裏に帰ると芸人から拍手喝采だった。

「スゲーよトップであんなウケんのかよ」

芸人達がナカナカを絶賛をする。

漫才を終えると結果を聞かずに次の仕事に向かった。

最近二人の仕事がバラバラ になることが多くなってきた。

漫才、仕事以外での会話はまるつきり無くなった。

WMOだけが唯一と言っていていいくらいだった。

中は、予選を終えてフジサンテレビにて収録をしていた。

セットにはデカデカと【矢村、中のやったりまSHOW】と書いて

あつた。

「今日も依頼がきております」

矢村がいつものように仕切る。

中は隣で相槌をうちながらスタジオに連れてきていた後輩をみた。その後輩は電話をしている様子だった。

そして頭の上に両腕で丸を作った。

「はい！！じゃあ！！VTRスタート！！」

「いきなり声大きくなつたな」

ナカナカWMO三回戦突破

中はいい気分で食べていた。

「パリブーさんも通つたか…WMO…」

店長から酒を勧められるが「すみません宴会のときとかしか飲まないんです」と断る。

「あれ？中さんじゃないすか？」

中は見たことない奴に声をかけられてビックリした。

「誰ですか？」

「ああ、オレはオンステージってコンビの石上っていいいます」

関西弁混じりに自己紹介する。

勝手に中の隣りに座り注文する。

唐揚げを頬張りながら「隣りで食うのかよ」石上に言う。

後輩とわかったら敬語使わなくなった。

「WMO出てはるんすか？」

石上が初対面にもかかわらずなれなれしく話してくる。

「出てるよ、エントリー番号は1番だしな」

「1番すか？オレらも1番欲しかったんすけどね…」

うらやましそうな口調で言うが、よく聞けばちょいちょいカッコつけようとする奴だということがわかった。

意外と会話は続き、さらに一時間くらいずっと話していた。

中が家に帰るときは、もう夜中の一時だった。

自分の部屋に入るとギターが置いてあった。

美優が寝てるため、静かに掛け布団をだして寝ようとしていた。そのとき、ケータイの着信音になった。

「はい、もしもし」

「あゝオレですけど…」

ディレクターからの電話だった。

「いやな、実はな、前にゴールデン番組言っただけで深夜なんだわ」

「マジですか」

笑いながら聞き返す、するとディレクターから「テレビをつける」

と言う指示が出た。
テレビをつけると、中のレギュラー番組のエンディングが入っていた。

「野球中継で一時間くらいおそいけどな」

「そうですか…わかりました…」

電話とテレビを切って、寝に入る中。

「ダメされた…」

寝る間に気付いた中だった。

準決勝、やったりまSHOW

十一月三十日―

WMO東京準決勝―

今までバラバラだったが三回戦を突破してきた東日本の芸人が一同に集まった。

楽屋で煙草を吸って時間を待つ内。

中は廊下で漫才の練習をしていた。

お互い会う機会がなく、WMOですら話す姿は見られなくなった。

「何してんすか？」

石上が中に声をかけてきた。

ネタ帳を閉じて、石上の方を向く。

「ネタ合わせだよ」

「いや、それは二人でやるものでしょ」

石上は中の隣に座って、漫才について語りだした。

中はうなずきながら聞いていた。

石上が段々熱くなっていくと、向こうから真っ白の服をきた細長い男が近付いてきた。

「石上！何してんねん！ネタ合わせの途中やろ」

石上は立ち上がって「今いくわ！！それじゃ失礼します」中に頭

を下げて白い男の方に歩いていった。

話しができるコンビがうらやましく思う中だった。

「ナカナカさん、そろそろお願いします！」

WMOスタッフが舞台裏全体に聞こえる声で呼ぶ。

「よし！」

気合いをいれて歩き出す。

内は煙草を消して舞台に向かった。

あらしーズがMCをしているところを舞台裏にあるテレビで見ている。
た。

近くにいた三田村が中に「前説かなりすべってたぞ」と笑う。

「マジですか」自分の髪をクシャっとしてしゃがんだ。

三田村は肩を叩いて「まあ前説頑張れよ」とふざけていた。

WMOスタッフが舞台袖までナカナカと次のアイルランドを連れて行く。

「ほんなら、準決勝始めましょう」

あらしーズがはけてきて出囃子になる。

中は大きく息をはいて勢いよく飛び出す。

「はーいどーも」

「ナカナカです」

二人の舞台を険しい眼差しで見つめる舞台裏の芸人達。
準決勝には、WMOの前に作った新ネタではなく今までやりなれた
ネタ、爆バト史上最高得点を叩き出したときのネタ。

今はネタを噛むことも無くなって、中はネタを楽しめるようになった。
た。

内も漫才のときは、何故か中に感謝、尊敬をしてしまう。

「ゴメン、出来ねえ」

「いい加減にしろ」

二人は黙って礼をして、はけていった。

舞台裏の芸人は温かく迎えてくれた。

三田村はスーツのネクタイを直しながら「お前らトップであんなウ
ケんのかよ」どこかで聞いたことあるような言葉を言われた。

「ありがとうございます」

深呼吸をするように息をはいて、静かに楽屋に戻り荷物を片付けて
いた。

「あれ？かえるんすか？」

石上が自分のネタ合わせ中にもかかわらず聞いてくる。

「まだ仕事があるからな」とカバン下げて劇場を後にした。

結果が出るのは明日、緊張で仕事に集中出来るかわからなかった。

フジサンテレビについたのは夜八時半だった。

収録は九時からとしか、いつも聞いていない。

【矢村、中のやったりまSHOW】は視聴者からのオファーを全力で主に中が叶える番組なのだ。

そのため、本番までその内容を知らない。

しかし、いつもは外口ケをしてからだが今日はスタジオでだった。

「おはようございます」

スタッフなどに挨拶して周る中。

既に矢村は来ていた。

「いや〜おはようございます」

「夜やねんけどな」

とりあえず矢村の隣に腰をかけるが、会話がないので気まずい中。中が思い切って話そうとすると矢村が「そや、WMOどうなった？」と前のめりに聞いて来た。

「いや〜明日になんないとわかんないっすね〜」

中は頭を書きながら答えた。

「手応えてきにはよ」

楽しそうに言う矢村。

それに「決勝いったでしょ、これは」と冗談混じりに言った。

「ほな、いかんかったら五千円な」

「わかりました、オレが決勝いったら言うこと一個聞いてください

ね」

矢村は「ヨッシャ！乗ったるわ」満面の笑顔で言った。

二人が話している間に収録の準備ができ、スタンバイするよう促された。

そして、本番が始まった。

九時ごろ内は芸人仲間と飲みに行っていた。

「誰いったと思います？」

「オレは、いかなかったら順番のせいだな」

「実力だろ」

飲みの席は夜遅くまで続いた。

フジサンテレビスタジオー

「さあ始まりましたけども、えゝまずオファ一のVTRが来ております

どうぞ」

画面にVTRが流れ始める。

現れたのは歌手の つんつ だった。

「えゝ矢村さん、中くん初めまして、つんつです。

えゝ今回は私が初プロデュースのボーカルグループ、まあアイドルグループを宣伝していただきたい」

VTRが終わり、後ろから炭酸ガスとともに8人の女の子とつんつが出て来た。

「どうも つんつです

んで後ろにいるのが、宣伝していただきたいグループの ナイトガールズ です」

8人が同時に礼をする。

緊張しているせいか動きや表情が固い。

緊張をほぐそうと話を聞いてみることにした。

「とりあえず自己紹介お願いします」

矢村は進行をしていく。

「ナイトガールズ、リーダーの 飯岡潤 です」

順番に自己紹介をしていく。

全員し終わると、すかさず矢村が つんつに話をふる。

「どうやって我々に宣伝しろと?」

つんつは「それを考えてもらいたくて来たんや」関西弁まるで言う。

矢村と中は、啞然として「えゝ投げ捨てる感じですか」とつんつに詰め寄った。

「二人で頑張ってくれんかな?」

頼まれた二人は声を合わせて言った。
「やったりましよう」

今日の収録が終わり明日から外口ケが始まることになった。

楽屋でどう宣伝するか考えている矢村と中。
アイデアが出ないまま十分がすぎた。

「よし、お前に任すわ
今までお前がやって来たんやし」

そう言って帰り支度を始めた。

「ちよっと待っててくださいよ」立ち上がって止めに入る。
しかし、矢村は「まあ、いつも何とかなってたやん
頑張りや」言い残して部屋を出ていった。

両手で顔を多い「またかよ」大きく息をはいた。
そのまま髪をかき上げ、適当な紙の裏に明日のアピールの案を書き
始めた。

十一時には局を出て、家に帰ってからも美優にアイデアをもらいな
がら宣伝方法を何とか作り上げた。

決勝進出者発表……

WMO大阪準決勝の日―

内は岡部との番組を収録していた。

決勝進出者発表は今日の午後、収録には見せないが緊張していた。

休憩時間に入るとかなりの量の煙草を吸い出す内。

十五分の休憩の間に煙草を一ケース開けてしまった。

そして、また収録にのぞんだ。

中は外で収録していた。

「では、宣伝ということなんですが……
こちらでいきましょうか」

中が一枚のボードをだす、それを見た矢村とナイトガールズは声を上げて驚いた。

「中…これはどうゆうことですか？」

矢村がボードを指しながら言う。

「神輿ですけど…」当たり前のように言う中。

矢村とガールズはポカ〜ンとしていた。

「こちらに乗ってもらいます」中が手を上げると古本興業の後輩達
が神輿を担いで来た。

「え〜マジっすか〜」矢村は笑いながら中の頭を叩いた。

「さあゝ宣伝しますよゝ」

「なに楽しんでんねん」

矢村は笑いながら、また中の頭を叩いた。

内は収録が終わり、古本の劇場に向かっていた。
途中で昼食をとるために電車を降りた。

「何食うかな…」

一人で街を歩いていると、道の先に人だかりを見つけた。

「なんだあれ…」

手をポケットにいれながら、人だかりに近付いていった。

人だかりの外側から見ていた。

「えゝなんだこれ…」

神輿に乗った女の子達がハンドマイクを使って喋っていた。

「スゲゝなゝ」内は人だかりから離れて何を食べるか迷っていた。

夜七時―

中と矢村、ガールズは収録最初の場所に来ていた。

「えゝ宣伝しましたけど…」

中が汗をながしながら言う。

矢村が「おつかれさまでした」と一礼する。

ガールズは笑っていた。

「まだ今日はここまでですけど……まだ宣伝は続きます
また来週！」カメラに向かって手を振った。

「何かつてにしめとんねん」矢村は笑いながら頭をファイルで叩いた。

初の宣伝の収録は温かい空気のまま終えたはずだった。

「あつ……今日発表の日だ!!」

宣伝に夢中になっていて大事なこと、WMOの決勝進出者発表のことを忘れていた。

「はい……OKです」スタッフが今日の撮影を終わらせた。

「もう行けや、時間ないんやろ」

「ありがとうございます!!」

矢村に礼を言つて劇場に行くために駅に向かって走つていった。

「ああ……緊張すんな」

劇場の舞台上にスクリーンを出し映像を流していた。

芸人達は客席からそれを緊張した面持ちで眺めていた。

審査員がもめているようで時間は発表の時間をかなりすぎていた。

「まだかよ……」三田村が小さく震えた声で呟いた。

「まあ待つてたらでるやろ」後ろの席から三田村の肩を持ちながら言う。

内も一番後ろの端の席で一人結果が出るのを待っていた。
九時をまわり劇場内の緊張が高まって行く。

「大変お待たせしました
決勝進出者10組を発表させていただきます」

劇場の芸人、大阪の芸人ともに緊張感が目に見えるほど漂っている。
今にも張り裂けそうな空気に「すいません！！発表は！！」一人の
男が入ってきた。

「今からだよ！静かにしてろ」
三田村が立つて中に言う。

「はい！すみません」

中は静かに内の後ろに移動した。

「えゝまず…決勝進出者1組目……」

エントリー番号が1番のナカナカは最初に呼ばれなければ予選落ち
が確定する。

中は緊張で尋常じゃなく汗をかいていた。
内も手の震えが止まらなかった。

「エントリー番号……」

1番 ナカナカ」

「……………」

「……………」

言葉を失う二人。

「エントリー番号1858番 オンステージ」

発表は続く中で二人は啞然としたようにスクリーンを見ていた。

結局劇場にいたメンバーで呼ばれたのは、

ナカナカ

パリブーツ

オンステージだけだった。

東京からは、パリブー、ナカナカの二組だけ。

「うっ……うっ……よし……ヨッシャ……」

中は泣きながらそう言ってガッツポーズをしていた。

「ありがとうございます……」

感謝の言葉をボソツと呟き、一人劇場から出て行った内。

第一回若手マンザイ王座戦

初代王者をかけた魂のぶつかりあいが今…始まるうとしていた。

ネタ順！！

決勝進出者発表の夜―

「やったな！！」

内は後輩を集めて家で飲んでいた。
裕子がいなくなってから数ヶ月が経ち部屋の広さに戸惑うことも少なくなかった。

「いやゝやりましたねゝ」

後輩達も決勝進出を喜んでくれた。

明日の午後から記者会見。

二週間後は決勝戦。

今日だけは出来るだけ喜んでおきたかった。

中は家でおとなしくしていたかったが、密着カメラが来てしまい緊張が解けずじまいだった。

「決勝、決まってどうですか？」カメラマンが聞く。

「大雑把ですねゝ聞き方が……」

まあゝ全力で頑張りますよ

エントリーが1番なんでね、このまま1番になりたいですね」
爽やかに答える。

「OKです」

ありがとうございます
頑張ってください」

カメラマンは部屋から出ていった。

緊張が解けた中は、そのまま横になった。

奥の部屋から「おつかれさま」美優が奥の部屋からやって来た。

「一千万取ってきてや」

「わかってるよ」

そして記者会見の日を向えた。

「えゝ第一回WMO決勝進出者に入場していただきたいと思います」

扉が開かれ「エントリー番号1番 ナカナカ」

スタッフに肩を押されてレッドカーペットを歩きだす。

「えゝナカナカですヨロシクお願いします」

「栄光の一番ということでそのまま一番になりたいと思います」

マイクの前で自己紹介して後ろの席につく。

次々と入場してくる決勝進出者。

「さあ皆さん席に着きましたね

これから若手マンザイ王座戦の記者会見を始めます」

山口アナが進行していく。

「改めて自己紹介と決勝戦に対する意気込みをお願いします」

エントリー番号順に自己紹介していく。

重い雰囲気が見えに漂う。

「えゝ爆笑チャーハンです」

「決勝の方ではコントを頑張りたいと思います」

その場にいた芸人が「おかしいだろ！」立ち上がる。
この後、三分間自己紹介でずっとボケ続けた。

「お前ら誰マークしてんの？」

慎之助が全員に聞く。
一瞬空気がざわつく。

「チャーハン是谁よ？」

「いや……織田信長ですかね」
「ぼくは小枝師匠です」

チャーハンはいつも通りふざける。

「パリブーツはどこやねん？」慎之助は笑いながら三田村達にふる。
「いや〜やっぱナカナカですかね、トップなのに、えげつなくウケるんすよ」

「え〜では、ネタ順を抽選をしたいと思います」

山口アナの言葉にまた緊張が走る。

「ナカナカさんお願いします」

二人とも前が出る。

「何番がええねん？」

慎之助の質問に内は「トップがいいですね、ずっとトップだったんで」中も隣でうなずいていた。

「だったら、トップでいいよ
みんな嫌がるどころやからな」

「ホントですか」

ありがとうございます」

ナカナカの順番1番に決まった。

ネタ順

- 1、ナカナカ 7年目 古本興業東京
- 2、イシオカワシマ 8年目 大竹プロ
- 3、ライダーズ 3年目 古本興業大阪
- 4、パリブーツ 10年目 古本興業東京
- 5、爆笑チャーハン 10年目 古本興業大阪
- 6、フジサン 7年目 松竹梅芸能
- 7、狛犬 9年目 古本興業大阪
- 8、シャイニング 7年目 古本興業大阪
- 9、田中中田 9年目 松竹梅芸能
- 10、オンステージ 4年目 古本興業大阪

カッコいいところ

決勝一週間前！

中は、やっぱりまSHOWの収録にきていた。

「先週に引き続き、ナイトガールズをせんでんしましょう」

矢村がタイトルコールをして収録が始まった。

「また外ですか…」中は残念そうに言う。

「あなたの指示ですよん」矢村は笑いながら言う。

公園で矢村と中は二人だった。

「ナイトガールズがいまけんけど……」矢村が中に投げ掛ける。

「彼女達にはもう準備してもらってますんで

行きましようか？」中はテレビ局を指しながら言った。

「ほんなら、最初から局内でいいやん」

矢村は言いながら局内に進んで行った。

フジサンテレビスタジオー

「お待たせしました」

中はスタジオで待っていたガールズに手を振りながら近付いて行った。

矢村はスタジオのセットを見て「こんなセットちゃったやん」驚いていた。

そこには芸人がネタをやるような舞台があった。

「今日は何するんですか？」ガールズの矢田が中に聞く。

「お前はいつもうるさいな」中は矢田に言った。

矢田が「なんでそんな言い方やねん」中の頭を叩いた。

続けて「今日はなにすんすか？」

中はナイトガールズの方を見て「今のアイドルがしてないことがあります」

何かわかりますか矢田さん？」

「いや…わか…」

「そうコントです」

「まだ答えてないやん」

中は声を張って「だから皆さんにはこの番組で週一でコントしてもらいます」みんなに言う。

シーンとするスタジオに客席からの笑い声とスタッフの笑い声が聞こえる。

「すいません、意味わからないんですけど…」矢田が手を挙げて言う。

中がまた声を張って「皆さんにコントしてもらいます」言った。

「だからする意味がわからないんですよ」矢田の口調が強くなる。

中也口調を合わせて「いいじゃねえか、コント一本やるだけでレギュラーなんだからよ」

その言葉を聞いたガールズの夏美と安田は

「いいじゃんやろうよ」

「ナッツもいいと思う」

それから1、2分ナイトガールズの会議が続いた。

リーダーの飯岡が「わかりました、やります」と言った。

中は笑って「それではコントの例としてこちらの3組続けてどうぞ」矢村が気にしていた舞台を指差しながら言った。

そのときの舞台裏には今ネタをしている、中と一緒に神輿を担いでいた デニーロ と、オリジナルレイディオそして、内がスタンバイしていた。

「久し振りだな」トップ以外でネタやるの」

「そうなんすか？」

「お前らも漫才じゃなくて、武勇伝説 やるの久し振りだろ」

藤林と喋っていた。

その奥で久しぶりの武勇伝説で異常に緊張している中澤がいた。

藤林は「けっこう緊張しやすいんですね」と中澤を見ながら言っていた。

そしてオリジナルレイディオが舞台に出た。

そのとき、中がスーツに着替えてやってきた。

中は「アイツらにいいとこ見せたいしな、リハーサル兼ねてWM O 一本目のやつやるか」と言った。

いつも稽古しているが、人前で新ネタをやるのは緊張する。

内はそんな素振り見せずに「ああカッコいいとこ見せるぞ」ネクタイをしめなおした

「なんでお前がきめんだよ」笑いながら中は言った。

一分後、二人の出番がやってきた。

ネタ見せの時間が終わりしめに入っていた。

「とやることですね

再来週からナイトガールズもレギュラーとして、コントと依頼を頑張っていたきまゝす

ではまた再来週」

「はいOKです」

収録が終わった。

内は帰り支度を始めた、そのとき何かを思い出したように振り返り

「中！これ」

WMOの入場権を渡した。

「なんで9枚も必要なんだよ」

「まあな

ありがとうな、また明日いつもんどこでな」

中はスーツを着替えて舞台裏から出ていった。

「楽屋くらい用意して欲しいよな」

内は一人で呟いていた。

決勝戦開幕！！

決勝戦当日ー

芸人たちは三時にテレ東のスタジオに集められた。
入念なりハーサルが続いていた。

「どんなネタすんねん？」

チャーハンの小鉄がみんなに聞き回っている。
それを見て、緊張がちよつと和らぐ芸人達。

「まあ全てはトップやからな」小鉄は中と内を見ながら言う。

「なんでプレッシャーかけるんすか」

「おかしいでしょ」

二人とも前に出て小鉄に言う。

終始笑顔でリハーサルは終わった。

本番三十分前ー

楽屋は空気がいっぺんしてリハーサルのときのような笑いはなかった。
た。

慎之助はすれ違う度に「優勝候補やと思つとるからな」と笑っていた。

それは芸人にはプレッシャーでしかなかった。

時間が過ぎるのが遅く感じる。

「あと十分か……」

オンステージの井田が白い服に着替えながらため息を漏らす。

「オレら一番最後だから一時間以上あるやろ」
石上が言つと「だから一番最後、嫌やねんな」井田が着替え終わ
つてイスに座る。

前説のオリジナルレイディオが客の空気をあまり暖めることが出来
ないまま本番を向えた。

楽屋にオリジナルレイディオが、しょんぼりして入って来た。
「ぜんぜんウケてへんかったな」

小鉄が笑いながら肩を叩く。

本番が始まった。

楽屋のテレビでオープニングを見てみると、中が号泣しているシー
ンが流れた。

すると、楽屋に爆笑が起こった。

「では、楽屋はどうなってるんでしょうか？田村くん」

司会の今野が楽屋に来ているレポーターの田村にふった。

「えゝ楽屋の方はですね、見ての通り静かです
中と小鉄が筋肉比べをしています」

その後、筋肉の下りが三十秒ほど続いた。

「楽屋からは以上です」

田村が楽屋から去って行き、また重い空気が漂う。

そして、「ナカナカさん、イシオカワシマさん準備お願いします」
戦いが始まった。

ナカナカが裏で、スタンバイすると「CMを挟んで出番ですんで…」
「スタッフも緊張したように言って音響に回った。

二人の緊張がピーク達するときCMが開けた。

「さあここからはお腹いっぱい笑っていただきますよう」今野が言う
と、隣の藤田美幸が「一組目はこちらのコンビです」続けて進めた。

【トップの意地

ナカナカ】

舞台の壁に文字が浮上る。

客席から「わあ〜」という声があがる。

中にチケットを渡されて会場に来ていたガールズと美優も声をあげていた。

文字が消え、扉が開いた。

そこに、エレベーターがせり上がり、ナカナカの姿が見えた。

中は筋肉アピール、内は満面の笑み。

緊張した素振りを決して見せなかった。

出囃子になり、マイクまで二人が走ってくる。

「はい！ど〜もナカナカです」

「ヨロシクお願いします」

努力の結晶……………

ナカナカのネタは、終盤に差し掛かっていた。
オリジナルレイディオの前説を取り消すかのように会場が盛り上がる。

審査員も笑いを見せていた。

「あれ……お前？」

「オレじゃねえよ！」

ネタが最後の盛り上がりを見せる。
会場も笑いが起こる。

「ゴメンできねえ……」

「いい加減にしろ」

二人とも礼をして、舞台の横の司会席に歩いていった。
内も多少汗をかいていたが、中は汗だくだった。

今野が「トップでよくやりましたよ」言う。

「ありがとうございます」内が今野質問にウケ答える。

「中くんはどうやった？」

「はあ……疲れました」

中の息切れ返答で会場に笑いが起こる。

今野は笑いながら「あれだけ動いてればね

さあそれでは審査員の皆さん点数の方お願いいたします」と言つと、
また会場が緊張した空気に包まれる。

内と中はもちろん、美優やナイトガールズも高得点であるように手を合わせて願っていた。

「点数が出ます!!」

9 5 !!

9 1

8 5

8 8

9 0

9 0

9 1 !!

合計は……… 6 3 0 点!!」

「順位の方は現在第1位です」

点数が出たが、高いのか低いのかわからずに静まり帰っていた。

「ありがとうございます」

口を開いたのは内だった。

遅れて中も頭を下げる。

会場にチラホラ拍手が聞こえる。

「えーじゃあ審査員長の慎之助さん、いかがだったでしょうか」今野が審査員にコメントを聞く。

慎之助はボールペンを両手で持ちながら「流石にトップを志願しただけあって、いいデキだと思いますよ」

二人は黙って頭を下げた。

「島田和七さん」

85点をつけた和七に感想を求めると、少し間が空いてから「んーまあこれが、基準になりますから低めですけど……漫才をもっと楽しんでくれたらよかったんやけどね……」

今野がそれを優しく言い換えてマイクを通して言った。

「ナカナカは暫定ボックスで結果を待つてください」

客席から沢山の拍手を受けて舞台裏にある暫定ボックスに座った。

2組目のイシオカワシマの出番だが、大きな緊張が解けた二人は相手のネタをちゃんと見る事ができないまま、4組目のパリブーツを向えた。

暫定ボックスには三組のコンビが座っていた。

三組終わってナカナカはトップを維持していた。

「次からは一組ずつ脱落者が出て来ます」

「4組目はこちらのコンビです」

【毒舌王

パリブーツ】

パリブーツの紹介が始まった。

二人は暫定ボックスにあるモニターを見た。

モニターにはテレビ用のVTRが映っていた。

現在3位のライダーはあきらめて、敗退したときのコメントを相談していた。

エレベーターがせり上がり、パリブーツの姿が客席に見え始めた。歓声とともに出囃子になる。

「パリブーツですヨロシクお願いしまゝす」

WMOの一つのヤマ場を向えた。

暫定ボックスには舞台と違い、笑いはなくモニターを黙って見つめているだけだった。

内は二本目は、このままでいいか考えていた。

しかし、その考えはモニター越しに聞こえる笑い声によってかき消される。

「やっぱ三田村さんたちか……」

中がボソツと呟く。

パリブーツの後にいる爆笑チャーハンも怖い存在だ。
松竹梅のエース田中中田も後ろに控えている。

最後の3組に残れるか、弱気に内はなつて来た。

「ああゝ！」

隣の中が声をあげた。

その声で、慌ててモニターを見ると

「95

97

合計は……………677点!!」

「順位のほうは……………現在第1位です!!」

大きな画面にかいてある順位表の1位がパリブーツに変わる。
中は笑うしかなかった。

渾身のネタを全力でもぎ取った630点を軽く超えられた。
悔しさが込み上げて来た。

席が一つずれライダーズは暫定ボックスからいなくなった。
そして、パリブーツが1位の席に座りCMに入った。

現在の順位

- 1、パリブーツ 10年目 677点
- 2、ナカナカ 7年目 630点
- 3、イシオカワシマ 8年目 596点
- 4、ライダーズ 3年目 559点
- 5、爆笑チャーハン 10年目
- 6、フジサン 7年目
- 7、狛犬 9年目
- 8、シャイニング 7年目
- 9、田中中田 9年目

10、オンステージ 4年目

紙一重

CMが開け爆笑チャーハンの出番がやって来た。
あと六組をしのげるか、内と中はネタのときより緊張しているように思えた。

爆笑チャーハンの漫才を見ることが出来なかった。

イシオカワシマは、何かに願うように頭を下げていたが、願いは叶わず客席からは笑い声と拍手が聞こえてくる。

モニターには審査員の顔が映る。

審査員も手を叩いて笑っていた。

「もうええわ」

「あざうした」

ネタが終わり、爆笑チャーハンが司会席の横に立つ。

「お話をうかがう前に点数をヨロシクお願いします」

今野が言うと、画面にはローマ字でジャッジの文字が出て来た。

「点数は……」

9
7

9
5

9
7

9
1

90

93

96

合計は………659点!!」

「順位のほうは現在第2位です!!」

イシオカワシマが静かに席から移動した。

ナカナカも一つ下の席に下がる。

もう後はない。

今までにない緊迫感が生まれて来た。

6番目フジサン、7番目狛犬、8番目シャイニングが出番を終えたが、紙一重でかわしてきた。

そして、今は松竹梅のエース田中中田が漫才をしていた。

「お前かツンドラが1位や」

「そこまで寒ないわ!」

落ち着いていつものように漫才をする。

暫定ボックスにいと周りが面白く見えてしまう。

「まさにスベリ芸」

「もうええわ」

ベテランの風格がある漫才の終わり方で一笑が起きる。

早く結果出て欲しい、ここをかわせば最終決戦はいったも同然だと

思っていた。

「点数は…」

固唾を飲む。

「93

91

90

88

87

89

90

合計は……628点!!」

「順位のほうは……現在第4位です」

「ああ、2点差!」

客席から「ああ……」という声が聞こえる。

強敵をかわし、内と中は最終決戦のネタの確認を始めた。
現在の順位

1、パリブーツ 10年目 677点

2、爆笑チャーハン 10年目 659点

- 3、ナカナカ 7年目 630点
- 4、田中中田 9年目 628点
- 5、狛犬 9年目 611点
- 6、イシオカワシマ 8年目 596点
- 7、フジサン 7年目 582点
- 8、シャイニング 7年目 577点
- 9、ライダーズ 3年目 559点
- 10、オンステージ 4年目

漫才

「さあ最後のコンビになりました」

「10組目のコンビはこちらのコンビです」

【関西のホープ

オンステージ】

エレベーターが上がり、最後のライバルの追撃が始まった。

最終決戦が決まった、パリブーツと爆笑チャーハンはネタの最終確認をしていた。

内は勝利を確信していたが、中はオンステージの漫才を一度見たことがある、だから気は抜けなかった。

「はいどうもオンステージです」

「いきなりなんやけどな」

「なにしたん」

二人の漫才は若いからこそできる世間知らずの漫才だった。

審査員はパリブーツのときのように笑っていなかった。

それを見てちょっと安心する。

「おい確認するぞ」内が声をかける。

「ああ…」中はネタの確認をするが、今一つ集中仕切れなかった。

「全力投球しはるタイプは合わんな……」

「だな…こっちのほう最終決戦来てくれたらいいな…」

三田村と遼が小さい声で話していたのを偶然、中と小鉄の耳に入っ

た。

警戒されることはいいことだと自分に自信を持っていいと受け取る。

「もうええわ」

「お前がいうな！！もうええわ」

オンステージが舞台から降りた。

司会席に行ったところでCMに入った。

「ヤバいな」

「大丈夫だって」

中は頭を抱えていた。

内が隣で肩を叩く。

CMが終わり、今野が「さあ最後でしたけど、どうでしたか？」二人に聞く。

そして、運命の点数の時がきた。

「630点、高得点ですけども……」

さあ点数が出ます」

モニターにジャッジの文字が出た。
心臓の音が聞こえてくる。

「95

95

9
1

8
8

8
6

8
7

8
9

合計は……… 631点!」

「現在の順位は…… 第3位です!!」

3位以内から自分たちの名前が消えた。

一点差で負けた二人は静かに楽屋に入ってしまった。

「惜しかったな」

今日負けた芸人達が温かく迎えてくれた。

「よかったですよ」

オリジナルレイディオが中に抱き付いて来た。

「やめろよ」

中は笑いながら押し退けた。

内は同期のフジサンの隣に座った。

「いやゝ悔しいな」上を見ながら内は呟いた。

モニターでは最終決戦トップのオンステージがネタをしていた。

一本目と変わらず、石上をバカにするパターンのネタだった。

楽屋は明るい雰囲気で漫才を見て笑っていたが、全員が来年に向けての闘志を秘めていた。

3組の漫才が終わり、審査員のジャッジの時が来た。

楽屋も静かに結果が出るのを待っていた。

画面に映っているパネルが、ひっくり返える。

「爆笑チャーハン

爆笑チャーハン

パリブーツ

パリブーツ

パリブーツ

爆笑チャーハン

爆笑チャーハン！！

初代チャンピオンは爆笑チャーハンに決まりました！！」

会場も楽屋も明るく拍手していた。

楽屋の芸人達は舞台に向かって歩きだした

表彰式は全員参加で行われた。

その後、打ち上げをしているときに爆笑チャーハンのマネージャーのケータイは鳴りっぱなし、改めてWMOの影響力を知ったのだった。

「ただいま……」

十一時ごろ家に着いた中。

「おつかれさ〜ん」美優はダラツとしながら言った。

座るといつになく、くらい空気が流れる。

「はいよ」美優が酒を渡した。

中は「いらねえよ、飲めねえから」酒を卓袱台に置いた。

美優は「今日くらいええやん、励ましの会ってことで」また中に酒を渡した。

中は黙ってコップについだ。

「乾杯」

「はい乾杯」

一気に飲み干す。

「ウチな、今日な兄ちゃんが頑張つてるところ見たら、ウチも夢に向

かつて頑張らなアカンと思って……………一人暮らししようと思って
んねん」

美優がまっすぐ目を見て言う。

中は少し黙ってから、「んゝいいんじゃないか、家とか決まってる
んだろ」

「決まってるないんやけど…」

中は酒をまた飲んで「んじゃゝ決めないとな」と言った。

「止めたりせえへんの」美優もまた一杯飲んで言った。

「元々、京都から飛び出して来たんだろ、そんなの心配してられね
えだろ」

美優はそっかと言って黙っていた。

「…なあ…………オレたち…面白くなかったかな…」

中が突然、美優に聞いた。

美優は、今まで見たことない中にビックリした。

「面白かったやん

あのメンバーで4位やで

あとちよつとで最終決戦までいけたんやし」

「そうだよな、あんがと

オレもう寝るわ」

布団を出し、寝てしまった。

「うちも寝よ」

隣の部屋の布団にくるまって眠りに入った。

仕事納め

次の日―

内は二日酔いで重い頭を支えながら大掃除を始めた。

後輩達も手伝いに来てくれる予定だが、来る前にはある程度片付けておきたかった。

しかし思うように体が動かず九時から始めたが、十二時になっても片付かず後輩が来てしまった。

「全然片付いてないっすね」

そう言いながら、次々と片付けていった。

内は、ただ見ているだけで部屋がキレイになっていく。

後輩四人は頭や首にタオルをまき、そのタオルには汗が染み込み始めた。

三時になると、借り始めの時よりも部屋がキレイになっていた。内は「ありがとな」と言いながら後輩達にビールを出した。

「ビールよりもアレ見せてくださいよ」

後輩達はテレビの前に座って画面を見ていた。

「中兄ちゃん、何してんねん？」

戸棚からホコリをかぶった段ボールの中から何かを探していた。美優が段ボールの中を覗くと、昔のナカナカの漫才を撮ったビデオが沢山あった。

「何してんの？」

「ちよつと探し物…」

そう言つて段ボールをひっくり返すと、ビデオテープが床に落ちた。美優は啞然としながら中を見ていた。

中は、床に散らばつたビデオテープをあさり「ヨッシャゝあつた！」と言つてテレビに向かった。

「なんやＡＶ探してたん？」

「違つわ！昔のオレらのネタのやつ探してたんだよ」

そう言つて段ボールをひっくり返すと、ビデオテープが床に落ちた。美優は啞然としながら中を見ていた。

中はデッキにビデオを入れて再生を押した。

画面には、【古本東西漫才合戦】と書かれたセットで漫才をするナカナカが映つた。

「今時もトップで漫才やってさゝ
ヒドかつたなゝただ滑りでよ…」

悲しそうに美優に言つた。

美優は笑いながら「知らんよ！」と言つて中が散らかしたビデオを片付け始めた。

「まあゝこの前は兄ちゃん達が二番目におもろかつたけどな…」

「一番じゃねえのかよ」

中からさつきまでの悲しそうな顔が消え、ノートとペンを引き出し

からだした。

一週間後―

年の仕事納め―

2009年残り二日残して最後の仕事。

WMOのファイナリストも集まって新年に放送する番組の撮影だった。

楽屋に入ると、芸人がワイワイと騒いでいる。

中は騒いでいるなかに交ざって話し始めた。

内は端で静かにiPodのイヤホンを耳につけていた。

それから何組かまとめてリハーサルを行い、本番を向えた。

四十組出る中でナカナカは三十番目とほぼ最後の順番だった。

収録が始まると司会の、垣根が進行していく。

二十八番目が終わり、ナカナカは袖で待機していた。

田中中田が珍しくコントをして会場を沸かせていた。

漫才もコントも作り上げていて、芸人たちは感心していた。

「麺を足でこねて」

「誰がするか!!」

笑いが会場をつつむ。

楽屋でみている芸人たちも手を叩いていた。

「もうエエわ!!」

礼をして漫才かのように舞台を降りて行った。

そして、出囃子がなり内と中は勢いよくセンターに向かって行った。

「はいドゥモ!!」

「WMOの4位です」

「言わなくていいよ!」

二人がアドリブで三十秒ほど漫才をして、本ネタに入っていた。

テンポ良くポンポン進んでいき、笑いもおきたが何か物足りなさを覚えた内。

「だから、どんだけ〜なんですよ」

「んなわけねえだろ!!」

また笑いがおきたが物足りない。

中は、絶好調に喋っていた、内の物足りなさには気付かずに、いつもより調子良く飛ばしていた。

「から、どんだけ〜」

「には、ならねえんだよ!!
もういいよ」

誰もが今日一番ウケた、と思っていたが、内はあまり納得していなかった。

「それでは今年一年もヨロシクお願いしま〜す」

垣根が上にあるカメラに向かって、手を振りしめた。

カメラも止まり、出演者は「おつかれさまでした」と言ってスタジオを出た。

中は、プロデューサーと話していた。

内は、すぐに楽屋に戻って今日のネタを見直していた。

「何してんねん？」

田中がお茶を飲みながら、楽屋に戻って来た。
ネタ帳を閉じて田中に見せた。

田中は、お茶の缶をゴミ箱に捨て、「去年はWMO…点数で負けしもたけど今年は圧倒的に勝つたるからな」

敵意むき出しに言い、着替えて楽屋から出て行った。

「こつちだつて負けねえよ」

誰もいない部屋で一人で呟いた。

五分位たつと、中が入って来た。

今日のネタのウケ具合に満足しているようだった。

漫才用のスーツから、

普段着に着替えて「今日ウケよかったな」と言っ出て行った。

「よかねえよ…」

そのネタの部分を破り捨て、カバンにネタ帳をしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9573i/>

笑えばいいじゃん

2010年10月12日04時23分発行